
未来のないイエロー

百億生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来のないイエロー

【Nコード】

N5461A

【作者名】

百億生

【あらすじ】

僕の家族は殺された。友達は何をいじめた。恋人を失ってしまった。そして命も残り少ない。タカヒコは絶望的な現実を終わらせる旅に出かけた。家族を殺した者を殺す為、この世界を壊す為に。最後にタカヒコは何を目にするのか？これは一人の少年の悲しい物語。

第1話：クスリ

「これがきつと……僕らの望んでいた世界だ」

タカヒコがモンタージュ 型で蔓延した東京で呟いた。街の至るところで黄色い液を吐いた死体で埋まっていた。タカヒコはその光景を見て第二次世界大戦中に起きたユダヤ人虐殺の光景に見えた。

タカヒコは最後の対モンタージュ 型ワクチンを取り出し、注射器の針で皮膚が剥がれかけた右胸に力強く刺した。

タカヒコは大声で叫んだ。その叫び声は犬が絞め殺される声にも似ていた。荒い息を立てながらタカヒコは東京駅を目指した。タカヒコが幼い頃から殺したかった人物を殺す為に。タカヒコは自分の命が後数時間しかもたない事を焦りながら、東京駅へと急いだ。その日は晴天で、三二度を超える暑い日だった。

2007年7月30日東京を中心に

「モンタージュ 型」

と呼ばれる劇薬がばらまかれた。この薬は大宮製薬が日本の政府に依頼された薬だった。この薬は最初の段階では黄色の液体状でこれが空気に接触する化学反応が起こり、有毒ガスに変わる。サリンと似ている為

「サリン2型」

とも呼ばれている。しかし、サリンと大きく違うのは異常なまでの殺傷効果である。このガス化したモンタージュ 型を吸い込んだ生物は五分以内には100%の確率で死亡してしまう。原因としてガスの中に含まれている

「コレラロン」

と呼ばれる物質が心臓に急激なスピードで流れ込み、心臓を停止させるのだ。そして血液がそのコレラロンにより染色体を刺激し、血液の色を黄色い色に変えてしまうのだ。

東京を一瞬にして黄色の世界に変えてしまったモンタージュ 型は

今も蔓延し続けている。

第2話：家族の香りに解き放たれて

「初めまして：ナカオ タカヒコです。これからお世話になります。よろしく。」

静かにタカヒコは淡々と言った。

1999年4月5日正午頃、タカヒコは三重県鈴鹿市にある孤児院「タンポポ」

に預けられた。タカヒコは一人っ子で、両親は麻薬密売のディーラーと呼ばれる仕事をしていた。両親はまだタカヒコが幼いうちから自分達の仕事の内容を真剣に話した。両親はタカヒコを心から愛し、タカヒコも両親を心から愛していた。

しかし1998年5月8日、タカヒコの父親が取引していたヤクザとトラブルを起こし殺された。タカヒコの目の前で。ヤクザはタカヒコのほうを見て薄気味笑いをして、こう言い残し去って行った。

「僕は天竜会直系藤本組の藤本清太郎だ。僕を殺したいだろ？ だったらいつでも殺しに来い。僕はいつでも待ってるよ。もし覚えていたら必ず俺を殺しに来いよ。」

当時タカヒコ8歳の頃だった。

警察はタカヒコに事情聴取したが、タカヒコは何も言わなかった。その後タカヒコは父親の母に預けられたが、1999年3月25日に他界してしまい、孤児院に預けられたのだ。

「こんにちは、タカヒコ君。今日から先生と他の子達と暮らすんだけど、大丈夫かな？」

タンポポに勤める藤本茜がそう言った。タカヒコは藤本の甘酢っぱい香水に不快感を思いながら言った。

「はい。僕は大丈夫です。」

藤本はタカヒコを仲良し教室と書かれた部屋に連れて行った。その

部屋には一歳児から8歳までの子供が12人いた。タカヒコの額から異常なくらい汗が流れ始めた。ザワザワし始める教室。その声を聞いてタカヒコはまた緊張と不安で押し潰される気分になった。それを察知した藤本は大声で言った。

「はい！静かにして！今日から新しいお友達が入りました。ナカオ タカヒコ君です。みんな仲良くしてあげてな。じゃ、タカヒコ君も一言お願い。」

タカヒコは必死で流れ落ちる汗を腕で拭いながら言った。

「初めまして。今日からタンポポで住む事になった、タカヒコです。仲良くしてください。」

すると子供達が拍手し始めた。タカヒコは無償に嬉しい気分になり、無意識に笑顔になっていった。

その日の夜タカヒコは藤本の部屋に行き、聞きたかった事を聞いた。

「先生。僕の父さん、母さんの事知ってる？」

藤本は暗い表情を浮かべ、

首を縦に振った。タカヒコは目に涙を浮かべ、藤本にこう言った。

「先生を母さんって思っていていいの？」

藤本も涙を流し、タカヒコを優しく抱きしめた。

「先生、タカヒコ君のお母さんに近づけるように頑張るからタカヒコ君も一緒に頑張って行こうね」

第3話：終わりを希望する少年

「僕はもう人間じゃない。ただの人形なんだよ。」

タカヒコは藤本に言った。タカヒコがタンポポに来て2ヶ月経った日、タカヒコは手にカッターナイフを握り締め、藤本に言った。藤本はこの奇妙な光景にただ恐怖というもののしか想像出来なかった。

藤本はゆつくりとタカヒコに伝わりやすく、一回呼吸を整え言った。
「タカヒコ君、なんか怖い夢でも見たん？先生何にも怒ったりなんかせえへんからゆつてみ。どうしたん？」

タカヒコは涎を垂らしながら呟いた。

「世界が…世界が僕の心臓を締めつけるんだ。」

藤本は聞き取れずにもう一度言うようにタカヒコに言った。するとタカヒコは笑いながら言った。

「先生。僕はきっと殺されるんだよ。アイツらに手足バラバラにされて、誰か分からないくらいにグチャグチャにされて殺されるんだ。だから僕はアイツらを殺すんだ。だってそうでしょ？アイツらは僕の父さんも母さんも殺して、僕だけ殺さないのはオカシイよ。いつか僕も殺される。だから…だから…僕がアイツらをブツ殺して、この日本も世界もブツ壊してやるんだ！！」

タカヒコは汗を大量に掻きながら叫んだ。その声で子供達も教員達も目を覚まし、藤本とタカヒコの部屋へ集まってきた。教員達はタカヒコがカッターナイフを持っていると分かると電話に駆け寄り、警察へ通報しようとした。すると藤本は叫んだ。

「やめてください！大丈夫です。私は大丈夫ですから、タカヒコ君と二人だけにしてもらえませんか？」

警察へ通報しようとした教員の武山が藤本に言った。

「藤本先生！タカヒコはナイフを持ってるんですよ？大丈夫って何が大丈夫なんですか！？」

藤本は武山に鋭い目をして言った。

「子供がやってる事にわざわざなんで警察が必要なんですか？もしタカヒコ君が怪しい行動を見せたら警察にすぐ連絡しますので二人だけにしてもらえませんか？」

武山は一分ほど考え、藤本に言った。

「もし何かあれば藤本先生に全責任があると警察の方に報告しますからね。」

そういうと武山は子供達と一緒に奥の部屋へ入っていた。

藤本はタカヒコに優しく話かけた。

「一体どうしたの？何の為にカッターを持ってんの？タカヒコ君のご両親を殺したい人達をやつつける為かな？」

タカヒコはその場にしゃがみこみ、静かに藤本に話始めた。

「僕の父さんはお薬を売ってる仕事をしてたんだ。色んな薬を売ってたんだよ。死なない薬、空を飛べる薬、ヒーローに変身する薬、いっぱい薬を売ってたんだ。でも父さんはその薬を自分で使っちゃいけないんだ。父さんは薬を売ってる人だからその薬を買うことはダメなんだ。でも父さんは使ってた。母さんも一緒にね。それである時、藤本清太郎っていうお客さんがその事を知っちゃったんだ。藤本って人は父さん、母さんを棒でいっぱい叩いてた。悪い事なのにいっぱい笑いながら叩いてた。それからテレビで見るピストルを使って、父さんと母さんを殺したいんだ。そして、僕に近づいて藤本ってお客さんが殺したいなら殺しに來い、待ってるって言ったんだ。それからすぐに出て行ったんだよ。」

藤本は溢れ出そうな涙を堪えて、タカヒコに震えた声で言った。

「タカヒコ君：辛い思いしてたんだね。でもね、その人を殺しちゃダメよ。絶対にダメ。もし殺したらタカヒコ君もそんな人の仲間になっちゃうんだから。だから、我慢して。先生と一緒に頑張ってるんだよ。」

タカヒコは小声で笑った。藤本はタカヒコが気でも狂ったのかと思いい、怖くなった。その時、タカヒコは言った。

「僕は殺すんだ。僕は大人にも負けない、アイツにも負けない力を
いっぱい持って殺しに行くんだ。殺すんだよ。」

するとタカヒコはその場から立ち、カッターナイフを落として奥の
部屋へ戻っていた。

藤本は恐怖で固まった。あの幼い子供の強烈な殺意をハッキリと感
じた。藤本はカッターナイフを拾おうと床を見た瞬間、ある紙切れ
を見つけた。藤本はその紙切れを開けて読んだ。そして、読み終え
た藤本は思った。この子の心に住む悪魔と殺意が大きな力になる前
になんとかしなくてはと。

「いつか殺す。そして、世界の終わりを目にする。僕が一番望む未
来。僕が一番この世界で欲しい物、それは全てが終わったという物。

」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5461a/>

未来のないイエロー

2010年11月12日20時15分発行